

親族呼称の消長

——富山県呉西地区について——

河 上 恵 里

はじめに

親族間や地域の人間との会話中に特定の人物を指す呼称を使用することがある。それは個人の名前ではなく、その家での立場の呼称や親族関係をさす親族呼称である。富山県ではこの子供に対しての親族呼称が特徴的で、「長男」を指す言葉だけでも「アンマ」「アンチャン」「タンチ」など複数の親族呼称が存在し、家格などで使い分けがされている。私自身これら親族呼称を認識してはいるものの、その使い分けについては具体的に把握しておらず使用する機会はほとんどなかった。「人」と「家」の関係が非常に強く影響しているこの親族呼称について、高齢層・若年層を対象に調査することによって実際どのような使い分けがなされ、どのような変化を辿ろうとしているのか明らかにしていきたい。

1. 調査概要

富山県の親族呼称は、東京方言のような末子型ではなく「長男」が中心である。この特徴は「家」と「人」の関係が深い、稲作地帯に見られるものであるが、今回調査した地点では漁村・農村も含まれているが富山県では農村・漁村の違いはほとんどなく、地域共通のものである。戦後の農地改革によって稲作地帯は大きく影響を受けたが、それが富山県の親族呼称にもどのような影響を与えているのかも見ていく。

1-1. 調査方法

今回使用する調査方法は以下の3つである。

調査（1）中高年層調査（対面式）…方言話者に直接質問して回答してもらう。呼称の収集と使い分けについても回答してもらう。複数回答可。

調査（2）若年層調査（アンケート）…アンケート用紙を用いての調査、調査（1）との比較。複数回答可。

調査（3）文献調査…富山県方言の親族呼称について記述した文献から呼称を収集し、調査（1）・（2）と比較する

・調査対象地域

今回調査対象とした地域は富山県呉西地区（右記地図中で灰色の部分）で、特に氷見市と

南砺市の五箇山地方を中心に調査を行った。

・調査対象の親族呼称

今回調査対象とする呼称は、「長男」「次男以降」「長女」「次女以降」の子供に対する呼称である。しかし調査方法（１）で予備調査を進めた結果、女子に関する呼称の回答率がよくなかったため、これらに女性に対する親族呼称として特徴的な「嫁」を加えて調査することにした。

富山県地図（富山県庁）



1-2. 調査（１）中高年層調査（対面式）について

・調査期間 平成20年8月から10月にかけて

・回答者の人数と内訳

- 回答者全体…34人（男性18人 女性16人）
- 氷見市在住…26人（男性13人 女性13人）
- 出身地が市外…4人（内、出身地が県外の人3人（全て石川県））
- 南砺市在住…6人（男性4人 女性2人）内訳は福野町2人 福光1人 五箇山3人
- 高岡市在住…1人

1-3. 調査（２）若年層調査（アンケート）について

・調査期間 平成20年9月から10月にかけて

・調査（２）での調査地域と対象者

- 氷見市立西部中学校の一・二年生73人（男36人、女37人）
- 富山県立南砺総合高等学校平高等学校の二年生31人（男23人、女8人）

外住経験者…中学5人、高校4人

祖父母の同居経験がある人が中学生では73人中65人で89%、高校生では31人中25人の81%となっている。

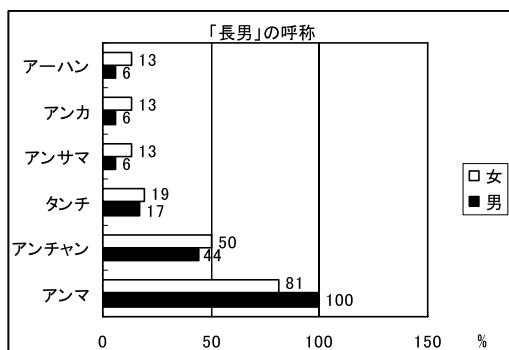
2. 調査（１）中高年層調査（対面式）

2-1. 調査（１）「長男」の呼称について

「長男」を指す親族呼称の言い方を回答したのは34人中33人で回答率は約97%、回答された語には「アンマ」「アンチャン」「アーハン」「アンサマ」「オアンサマ」「タンチ」「アンカ」の7つ、その中で最も多くの人が回答していたのが「アンマ」の32人、次が「アンチャン」の16人で、「タンチ」は6人、「アンサマ」は3人（「オアンサマ」も「アンサマ」に含む）、「アンカ」は3人、「アーハン」は2人である。

グラフはそれぞれの呼称の男女別の回答率を示した。「アンマ」は全体の9割以上の人が

認識していたので富山県の呉西地区で標準的に使用されている語だといえる。男性全体でみた場合「アンマ」の回答率は100%となっており、回答者のうち男性は全ての人が「アンマ」を「長男」の呼称として認識していたことを示している。それに対し女性は81%と男性と比べるとやや低い。「アンチャン」については男性より女性の方が高く半分以上の人



が認識している。また女性では「アンマ」「アンチャン」の両方を「長男」の呼称として回答していても「アンチャン」を使用し「アンマ」は使用しないという回答が目立った。「アンマ」を除く全ての語で女性の方が回答率が高いという結果が出た。

・「長男」を指す呼称の使い分けについて

「長男」の親族呼称が複数ある場合の使い分けの基準を聞いてみたところ以下のような回答が得られた。

1) 「アンマ」

- ・近い人に対して使う。(南砺市福光 男 50歳)
- ・「アンマ」は一般的な言い方(氷見市日名田 男 75歳)
- ・(「アンチャン」と比べて)丁寧さを省く言い方(氷見市 女 53歳)
- ・「アンマ」は敬った言い方(南砺市上梨(五箇山) 男 45歳)

2) 「アンチャン」

- ・「アンマ」より丁寧な言い方(南砺市福光 男 50歳)
- ・オヤッサン(旧家)の家の子のみに使用する言い方(氷見市日名田 男 75歳)

3) 「タンチ」

- ・良家の子供にのみ使用する(氷見市 男 52歳)
- ・自分の子供に対しては使用しない(氷見市日名田 男 87歳)
- ・自分の子供には使用しない、良家の長男のみに使える(氷見市灘浦 女 66歳)
- ・ダンナハン(旧家)の家の子供にしか使わない(氷見市日名田 女 65歳)
- ・良家の長男に対しての呼称(氷見市 男 53歳)

4) 「アンサマ」

- ・他人の子供に対して使用する(砺波市福野町 女 67歳)

5) 「アンカ」

- ・その部落(村)で最も下級の家の長男に対して使う(氷見市日名田 男 75歳)

6) 「アーハン」

- ・ダンナハン（旧家）の家の子供のみに使用する（氷見市日名田 男 72歳）
- ・「アンチャン」より丁寧な言い方（氷見市日名田 女 75歳）

右上の表はこれらの回答から家格と呼称を合わせたもので、上から下へと家格が低くなっている。「タンチ」「アンサマ」についての回答から家格以外にも使用に制限があり、「オラントコ ノ アンマ（私の家の長男）」とは言えるが「オラントコ ノ タンチ（私の家の長男）」という表現はできない。「タンチ」について、回答者全てが「現在は使用されていない」と回答した。使用対象の家が旧家という縛りがあり対象が少ないこと、社会構造の変化による「家格」の差というものが地域の中でもなくなったため使用されなくなったのではないかと考える。

| 呼称 | 家格 |
|----------------------|----|
| タンチ | 上 |
| アーハン | |
| アンサマ アンチャン アンマ | 中 |
| アンカ | 下 |

「アンマ」と「アンチャン」は他と差をつけ回答率が高かったが、この二つの使い分けについては「アンマ」よりも「アンチャン」の方がより丁寧な表現で、相手に対して敬う気持ちを示す。「アンマ」が「アンチャン」より認識されていたのは使用対象の範囲が広く「長男」の呼称として最も一般的なものとして使われており、また「タンチ」のように自分の家の子供には使用できないという使用制限もないためと思われる。更にこれらの回答から「アンチャン」が男性よりも女性の方が回答率が良かったのは「アンマ」にはない「アンチャン」が持つ丁寧さに理由があるのではないかと考える。丁寧さを持ち相手を敬う表現として使える語であるが、「タンチ」ほど明確な使用制限がなかったため「タンチ」より「アンチャン」の方が親しみの持てる語だったと言える。

「アーハン」が旧家の家の長男にのみ使用できるのであれば、「アンサマ」よりも使用対象が限られてくるためその認識率が低くなっているのではないか。これらから家格など使用対象範囲が限られている語や使用に制限がある親族呼称は現在では回答率が低いということが分かる。

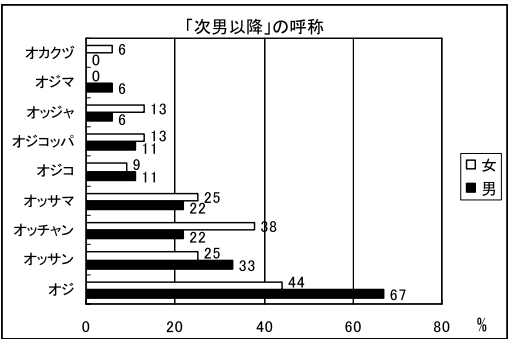
・「長男」の呼称の使用

方言話者に回答してもらった「長男」の呼称を自身が使用するかどうか、また使用の頻度を答えてもらった。使用すると答えた人が約70%と高い割合であるが、その中でも以前と比べてあまり使わなくなった人が5人で約22%と、「長男」の呼称について使用頻度を減らしてきているという変化が確認できる。

| | | | |
|-------|-------------|----|-----|
| 使用する | 使用する | 15 | 45% |
| | 以前より使わなくなった | 5 | 15% |
| | あまり使わない | 3 | 9% |
| 使用しない | | 10 | 30% |

2-2. 調査(1)「次男以降」の呼称について

「次男以降」を表す呼称としてあげられたのは「オジ」「オジコ」「オジコッパ」「オッサン」「オッサマ」「オッチャン」「オズ」「オジマ」「オカクツ」「オッジャ」の11個である。「次男以降」と一括りにされている通り、富山県の親族呼称では男子を「長男」と「その他」に区別する。「次男以降」の子供を区別する習慣がないが「長男」よりもその種類は多い。



「オジ」は回答者全体で56%の人が認識しており約半数の人が回答して、回答率は男性の方が高い。次に認識率が高かったのは「オッサン」「オッチャン」である。「オッサン」の認識率は男性の方が高く「オッチャン」は女性の方が高かった。「オジ」の回答率が群を抜いており、「オッサン」以下の回答は分散されて「オッサン」「オッチャン」「オッサマ」の認識率にあまり差はない。「長男」の呼称と比較すると「次男以降」の呼称の認識率は全体的に低い。

・「次男以降」を指す呼称の使い分けについて

「次男以降」の呼称の使い分けの基準について聞いたものを以下に記す。

「オジ」

・さげすむ言い方 (南砺市五箇山上梨 男 45歳)

「オジマ」

・「オジ」よりも丁寧な言い方 (南砺市五箇山上梨 男 45歳)

「オッチャン」

・「オジ」「オジコ」よりも丁寧な言い方 (氷見市 女 53歳)

・丁寧な言い方 (南砺市福光 男 50歳)

・「オジコッパ」よりも丁寧な言い方 (氷見市灘浦 男 68歳)

「次男以降」の呼称では「長男」の呼称のときのようなはっきりとした家格での制限と言う回答は得られなかった。しかしその中でも敬意の高さによる制限がある。それを表したのが右上の表である。

「次男以降」は生まれた順番によって呼称を変えたりするという区別はないとしているが、五箇山地方では「ガゴ」を「末子」の意味で使用するという回答も得られた。後に示す、調査(3)の結果ではこの語は「乳児」を指すが、この場合「末子」として使用されているため対象の年齢が変わっても「ガゴ」と呼ぶという。しかし「次男以降」の

| 呼称 | 家格 |
|-------|----|
| オジマ | 上 |
| オッチャン | |
| オジ | 中 |
| オジコ | |
| オジコッパ | 下 |

呼称を調査するにあたって、複数の語を回答した人に生まれた順での使い分けがあるのかと尋ねたところそのような使い分けはなく、必要があるときは生まれた順番の数をつけて「三番目のオジ」などと表現するという回答だった。

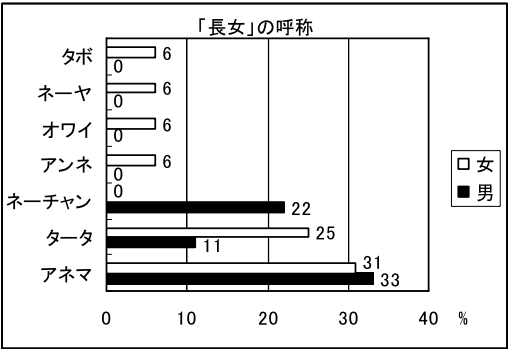
・「次男以降」の呼称の使用率

「次男以降」の場合、消極的使用の人の割合が「使う」とほぼ同程度となっており、「長男」の呼称と使用率は同じだが、使用頻度がもともと低い「あまり使わない」の回答人数が「長男」のときよりも多いことから、「次男以降」の呼称の方が以前から使用頻度が低くなっていたといえる。

| | | | |
|-------|-------------|----|-----|
| 使用する | 使用する | 12 | 36% |
| | 以前より使わなくなった | 6 | 18% |
| | あまり使わない | 5 | 15% |
| 使用しない | | 10 | 30% |

2－3. 調査（１）「長女」の呼称について

「長女」の呼称としてあげられたのは「アネマ」「アンネ」「ネーチャン」「オワイ」「ネーヤ」「タータ（タタ）」「タボ」「アネ」の8つで、34人中23人が回答して、回答率は68%だった。回答率は「長男」「次男以降」の男性に関する呼称と比較するとかなり低い。「長女」の呼称としては回答は「アネマ」「タータ」「ネーチャン」に集中しているという回答率となっている。「アネマ」が男女ともに回答率が高い呼称であるのに対し、男性のみが回答している「ネーチャン」と、回答者の内女性の割合が高い「タータ」では多少の性差が表れている。また男性の方は回答した呼称の種類が少なく「長女」の呼称に対して意識が低いことが読み取れる。



・「長女」の呼称の使い分けについて

回答した「長女」の呼称について、どのような基準を持って使い分けをしているのか聞いたものを以下に記す。

「ネーヤ」「アネマ」

・嫁いだ人（「長女」）を「ネーヤ」「アネマ」と呼ぶ（氷見市日名田 79歳 女）

「タータ」

・子供が小さい頃のみ使う（氷見市灘浦 68歳 男）

・女の子の子供の意味でも使用する。小さい頃にのみ使える（南砺市福光町 50歳 男）

「タボ」

・上流の家の子供にのみ使用する（氷見市日名田 65歳 女）

「長女」の呼称としてあげられた語の使い分けについては「タータ」についての回答にある通り「長男」や「次男以降」のときには見られなかった年齢での使用制限がある。また嫁いだ「長女」に対してはその呼び方を変化させて「ネーヤ」「アネマ」と呼ぶと回答した人もいた。「アネマ」は「嫁」の呼称としても使用されるため幅広く活用できる女性に関する呼称ということができるが、「ネーヤ」はあくまでも「長女」という位置にいながら家を出た人間を指す呼称である。「タボ」が「長女」の呼称では上流の家で使えるなど「長男」と同じように、家格といった階層性をもった制限が「長女」の呼称でもみられた。

・「長女」の呼称の使用率

「長女」の呼称を回答した23人のうち使用すると回答したのは7人で約30%と低い。

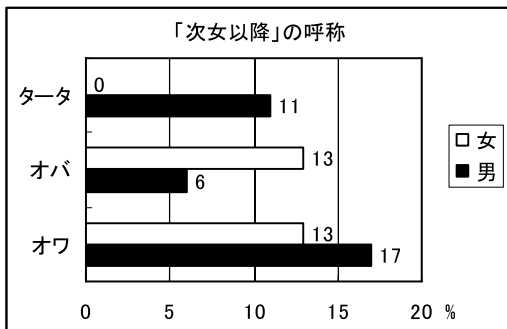
使用すると回答した人のうちその頻度を「使う」「（使用するが以前と比べて）あまり使わなくなった」「あまり使わない」の

| | | | |
|-------|-------------|----|-----|
| 使用する | 使用する | 3 | 13% |
| | 以前より使わなくなった | 3 | 13% |
| | あまり使わない | 1 | 4% |
| 使用しない | | 16 | 70% |

3通りにわけて回答してもらったところ、「使う」と回答した人が3人、「（使用するが以前と比べて）あまり使わなくなった」人が3人、「あまり使わない」が1人で、消極的使用傾向の人が「使う」の人数よりも多い。「（使用するが以前と比べて）あまり使わなくなった」と消極的使用に転向した人の割合が「使う」と回答した人と同数になっており、中高年層の年代においてすでに使用頻度が減る傾向があるという変化を見せている。

2-4. 調査（1）「次女以降」の呼称について

「次女以降」の呼称としてあげられたのは「オワ（オーワ）」「タータ」「オバ」の3つで、回答したのは34人中10人で29%と、同じ女性に関する「長女」の呼称よりもかなり低い。また「長女」の呼称としてあげられた「タータ」が「次女以降」を指す語としてもあげられた。



・「次女以降」の呼称使い分けについて

使い分けについての回答は「タータ」のみで、「次男以降」の呼称と同じく家格での使用制限はみられなかった。「タータ」についての回答も「長女」の呼称としての「タータ」と同じく対象の年齢の使用制限であり、「長女」の「タータ」との差はなく、調査(3)では「娘」

の呼称としてあげられている。

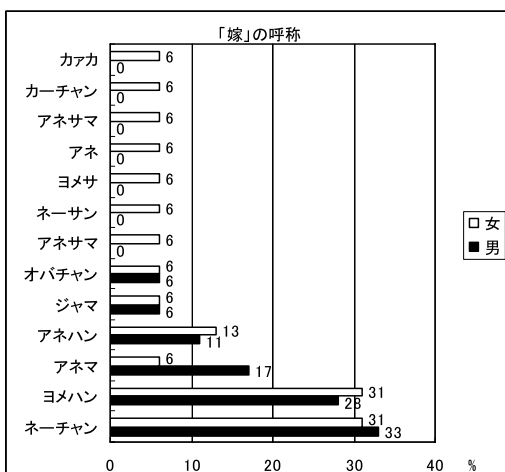
・「次女以降」の使用率について

「次女以降」を回答した10人のうち使用すると回答したのは2人のみで使用率はかなり低く「次女以降」の呼称はかなり前から使用しない傾向にあったといえる。

| | | | |
|-------|-------------|---|-----|
| 使用する | 使用する | 0 | 0% |
| | 以前より使わなくなった | 0 | 0% |
| | あまり使わない | 2 | 20% |
| 使用しない | | 8 | 80% |

2-5. 調査(1)「嫁」の呼称について

「嫁」の呼称としては「アネマ」「アネハン（オアネハン）」「ネーチャン」「ネーサン」「オパチャン」「ジャマ」「ヨメハン（オヨメハン）」「アネ」「アネサマ（アネサ）」「ヨメサ」「カーチャン」「カァカ」の13個の語が上げられた。「長女」や「次女以降」と比べて種類が多く回答率も今回調査した女性に関する呼称の中で一番高い。「長女」の呼称としてあげられた「アネマ」が「嫁」を指す呼称としても使用されている。回答率が最も高かったのは「ネーチャン」で男女比にすると男性の方がやや高い。



次に回答率が高かったのは「ヨメハン」である。「アネマ」と「アネハン」だが、「アネマ」は男性の方が回答率が高い。それ以下の語の回答率は低く、「ネーチャン」と「ヨメハン」が他の語と差をつけている状態となっているが、「長男」や「次男以降」といった男性の親族呼称と比較すると全体的に回答率が低い。

・使い分けについて

「嫁」の呼称の使い分けの基準や意識について尋ねたところ以下のような回答が得られた。「ネーチャン」

- ・長男の嫁に対して使う（氷見市灘浦 68歳 男）
- ・長男の嫁に対して使う（氷見市日名田 45歳 女）

「ヨメハン」

- ・丁寧な言い方。さらに丁寧にするときは「オ」をつける（氷見市 53歳 女）

「アネマ」

・一般の家庭（中流の家）の嫁に対して使う（氷見市日名田 75歳 男）

「アネサ」

・義姉の嫁のことで、身内の人間に対して使う（南砺市五箇山上梨 45歳 男）

「オバチャン」

・次男以降の嫁に対して使う（氷見市灘浦 68歳 男）

・次男以降の嫁に対して使う（氷見市日名田 45歳 女）

「オアネハン」

・旧家など上流の家の嫁の呼称（氷見市日名田 75歳 女）

「カাকা」

・母になった嫁の呼称（氷見市日名田 79歳 女）

「アネハン」を更に丁寧にした形の「オアネハン」は「長男」「長女」にも見られた階層性の制限がある。

「ネーチャン」を「長男」の「嫁」として、「オバチャン」を「次男以降」の「嫁」に使用する呼称だという回答がある。この使い分けについては現在氷見市内でのみ見られるものである。「アネマ」が中流の家庭での呼称だという回答があるが、「アネマ」の全体での回答率は12%とあまり高くなく、男女別の回答率で見ると男性が「嫁」の呼称として使用する傾向の語であると考えられる。「アネマ」は「長女」の呼称としてもあげられているが、「長女」の方では全体で32%の人が認識していることと比べると「嫁」として回答率は低い。「アネマ」は「長女」「嫁」どちらの意味でも使えるが、中高年層にとっては「長女」のことを指している語だといえる。

「アネマ」を「長女」「嫁」どちらの呼称としても回答していたのは2人で、南砺市福光町の50歳の男性と氷見市日名田の79歳の女性だった。男性の方は「長女」として「アネマ」は現在は使用していないと答え、女性の方は「長女」の回答のときに「お嫁に行った人は「アネマ」「ネーヤ」と呼ぶ」と答え、この場合の「アネマ」は「長女」だけでなく「嫁」の意味を含んでいる。また、「長女」と「嫁」のどちらの呼称でも「ネーチャン」を答えていた人は氷見市灘浦の男性で1人だけだった。女性に関する呼称の「長女」や「次女以降」でみられた年齢での制限は「嫁」の呼称では見られなかったが、「カাকা」が母親になった「嫁」に対する呼称という回答があり、その他の女性に関する親族呼称で見られた年齢での制限という性質は、女性は年齢によって「家」の中での立場が変化するからではないかと考える。

・「嫁」の呼称の使用率

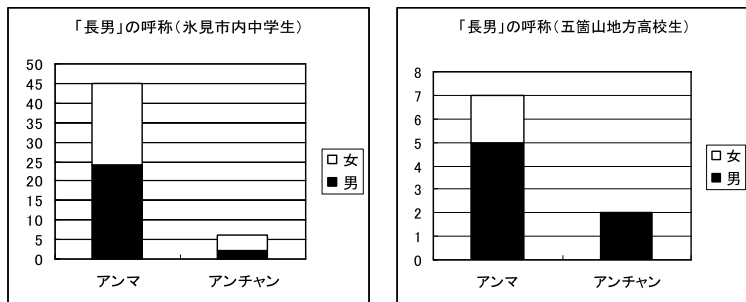
使用率は「長男」と同じで、女性の呼称の中では一番高い。「使用する」と回答した人の中で頻度別にわけると「使用する」と回答した人が10人、「（使用するが以前と比べて）あまり使わなくなった」が5人、

| | | | |
|-------|-------------|----|-----|
| 使用する | 使用する | 10 | 38% |
| | 以前より使わなくなった | 5 | 19% |
| | あまり使わない | 3 | 12% |
| 使用しない | | 8 | 31% |

「あまり使わない」が3人だった。消極的使用傾向の人が約45%で、「長男」の呼称より高い。「あまり使わなくなった」と以前より使用する機会が減っていることを示す回答が28%と高く、以下の世代での認識率が低くなるのではないかと考えられる。

3. 調査（2）若年層調査（アンケート形式）

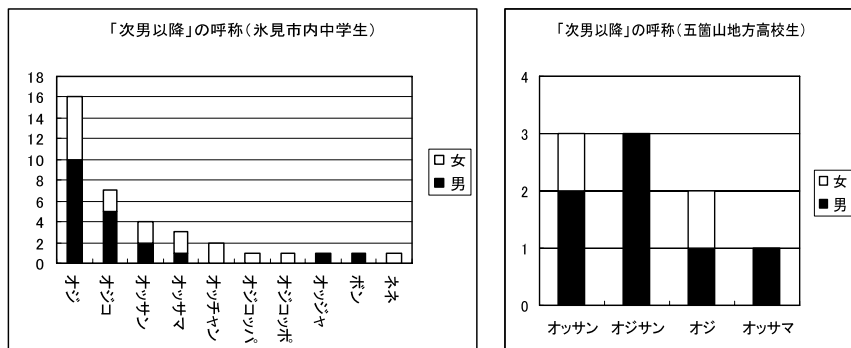
3-1. 調査（2）「長男」の呼称について



氷見市内の中学生の回答率は62%で、五箇山地方の高校生は29%である。どちらも「アンマ」「アンチャン」と調査（1）で回答率が高かった2つをあげている。調査（1）で見られるこの2つの語の性差も氷見市内の中学生には少し確認できるが、五箇山の高校生には見られない。

3-2. 調査（2）「次男以降」の呼称について

氷見市内の中学生の回答率は37%であるのに対し、五箇山の高校生は23%で、氷見市内の中学生の回答では10個の呼称があがり、五箇山地方の高校生は4個と回答された呼称の数にも差がでた。中高年層に対する調査（1）では収集されなかった語が回答の中にも含まれているのが特徴的である。



「ネネ」「ボン」は調査（１）では収集されなかった語で、調査（３）では「ネネ」は「乳児」を、「ボン」は「息子」を指す。同時に行った「回答した呼称は家庭内で使われているか」という問いに対し、「ボン」「ネネ」を回答した２人ともが「使用されていない」と答えた。

３－３．調査（２）「長女」「次女以降」「嫁」女性に関する呼称について

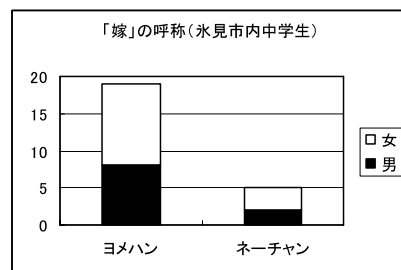
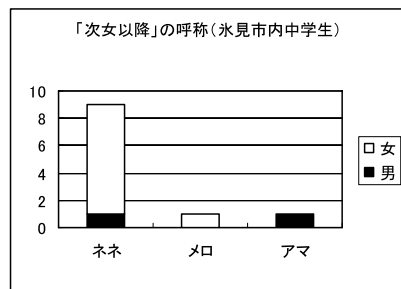
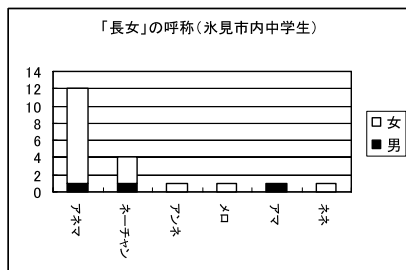
女性に関する親族呼称について、五箇山の高校生からは回答が得られなかった。氷見市内の中学生の回答率は「長女」の呼称では22%、「次女以降」は15%、「嫁」は33%だった。

「長女」について回答された語のうち「ネネ」「アマ」「メロ」は調査（１）では収集されなかった語である。「ネネ」については前述したとおりで、「アマ」「メロ」も「長女」という限定はなくどちらも女性を指す呼称である。

「次女以降」について、調査（２）で収集された３つの語は調査（１）では収集されなかった語で、「次女以降」の呼称は若年層の中では死語となっていると言える。

「長女」「次女以降」どちらでも回答されている「ネネ」「メロ」「アマ」は「女性」を指す言葉であるが、「次男以降」の「ボン」「ネネ」と違い「家庭内で使用されている」という回答がある。

「嫁」で回答されたのは「ヨメハン」と「ネーチャン」で、調査（１）で「長女」「嫁」どちらでも回答率されていた「アネマ」は回答がなかった。若年層の中では「アネマ」は「長女」を指す呼称と認識されているようである。



・調査（２）のまとめ

調査（２）では若年層が親族呼称をどの程度認識し使用しているかを調査したが、氷見市内の中学生と、南砺市五箇山地方内の高校生では回答に大きく差があり、氷見市内の中学生の方がこれらの親族呼称に対し意識的である。「次男以降」「長女」「次女以降」で調査（１）

では収集されなかった語を回答しているのが特徴的で、自分達が住む地域で使用されている呼称に対し、それらが標準語とは違うものと強く意識した上でこのアンケート調査で回答していることが分かる。「長男」と「嫁」は調査（１）で回答された語のうち数は減っているが中高年層が回答していた同じ語である。家庭内での家族が使用していると答えている割合が高かったのもこの２つの語である。調査（１）の使用・使用頻度の変化の調査でも「長男」「嫁」は積極的使用の割合が高かった語で、その影響が見える。

４．調査（３）文献調査

４－１．調査（３）文献と調査（１）・（２）の比較

次の表では『越中郷土研究第四巻四号～九号』昭和15年５月から昭和16年３月に掲載されたものから親族呼称をまとめて、調査（１）と調査（２）で収集された語と比較した。

| 標準語 | 方言 | 使用地域 | 階層 | 調査（１） | 調査（２） |
|-----|--------|-------------|-----|-------|----------|
| 兄 | アンドン | 中・婦 | | × | × |
| | アンマ | 全県下 | | 長男 | 長男 |
| | アンカ | 東・西・射・高・氷 | 中 下 | 長男 | × |
| | アンチャン | 富・高 | 上 中 | 長男 | 長男 |
| 息子 | タンチ | 氷 | | 長男 | × |
| | ボン | 氷 | | × | 次男 |
| | アンチャン | 富・高・下 | | 長男 | 長男 |
| | アンマ | 下・中・東 | | 長男 | 長男 |
| | アンボ | 下・中・東 | | × | × |
| 娘 | アンネ | 全県下 | | 長女 | 長女 |
| | タータ | 氷・高・東・西 | 上 | 次女・長女 | × |
| | ネーマ | 射 | 下 | × | × |
| | ニョーボッコ | 下 | | × | × |
| | ネーチャ | 中 | | × | × |
| | ネーヤ | 中 | | 長女 | × |
| 乳児 | ネネ | 全県下 | | × | 次男・長女・次女 |
| | ガゴ | 中 | | 末子 | × |
| 花嫁 | ヨメサ | 中・下・上・氷・射・婦 | | 嫁 | × |
| | ヨメハン | 全県下 | | 嫁 | 嫁 |

使用地域の表記は、上…上新川郡 中…中新川郡 下…下新川郡 東…東礪波郡 西…西礪波郡 婦…婦負郡 射…射水群 氷…氷見郡 富…富山市 高…高岡市とした。（背景が塗りつぶされているのは呉西地区）

「ボン」は息子という意味で資料内で確認できたが、「長男」「次男以降」という限定はみ

られない。文献中の「息子」の呼称のほとんどが調査（１）・（２）では「長男」の呼称として回答されている場合が多いことから、「ボン」は「息子」の中でも「長男」を指す呼称としての使用があった可能性は高い。調査（２）では「次男以降」でその回答が確認されているため、「息子」という条件があてはまる「次男以降」として回答したのではないかと考えられ、「ボン」については中高年層と若年層の間で認識にずれが生じているといえる。

「乳児」の呼称の「ネネ」と「ガゴ」だが、調査（１）で収集した「ガゴ」は「末子」を指し、調査（２）で「ネネ」は「長女」「次女以降」の呼称として収集している。「ガゴ」は指す対象を「乳児」から「末子」というものに変化してしまった語という回答がある。

「ネネ」については調査（１）収集されず、調査（２）で確認できた語で、若年層の中で意味を変容させつつある語なのではないかと考えられる。しかし「ネネ」を回答した人のうち９割近くの人が自分は使用していないと答えており、意味を変容させたまま今後伝わっていく可能性は低いと考える。

・呼称使用についての制限

明治39年（1906）の『北陸政報』に掲載された「富山風俗方言風俗百首」の注釈には以下のように記してある。

- 長男をあんま、二三男を総へておじといひ
- 新婦及び妻女の若きを総てあねはんといふ
- 四十歳頃まで妻は夫をあんはんと呼べり
- 二・三男の戸主になりたるをおっさんといふ

ここで「アネハン」の指す対象が年齢によって制限されている。女性に関する呼称が年齢によって変化するのはこの頃からすでにあったものと分かる。「アンハン」が「長男」の意味だけではなく、妻が夫を呼ぶときに使うことが分かった。同じ「次男以降」を指す「オジ」と「オッサン」だが、「オッサン」は戸主になった人間という制限がここではある。

5. まとめ

1). 階層性について

調査（１）で、「長男」「長女」「嫁」の呼称にはっきりとした家格によつての制限があった。これらは「家」を継ぐ可能性がある立場の人間である。生家を出る「次男以降」「次女以降」にこれらの制限は見られない。

稲作地帯にみられる親族呼称の特徴である、「長男」中心の型は土地との関係が深い。稲作地帯では土地と仲立ちとした、地主と小作人という階層性があり戦後に農地改革がおこるまでそれらは続いた。調査（１）の使い分けの中で回答された「良家」というのは地主を指している。土地により「家」は上流・中流・下流に分けられ、「家」と関係する親族呼称もまたその影響を受け複数存在しそれらを使い分けることになる。調査対象地域には漁村も含まれていたが、漁村内でも網元と漁師という、農村部で言う地主と小作人の関係があった。そのため、農村部と漁村部での差異が見られなかったと考える。

中高年層で階層性を意識した使い分けについての回答が得られたが、「アンチャン」は上流の家と対象を限定しているにも関わらず「アンマ」の次に認識されており、調査(2)でも回答率が高かったのは「アンチャン」が自分の家の者に対しても使用できるというところが大きく関係している。「タンチ」が消え、「アンチャン」が残ったのはこの差である。また、井伏鱒二の『樵ツァ』と「九郎治ツァン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること⁽¹⁾』の中でも語られている通り上層の言葉を使おうとする傾向が現れている。しかし土地を中心とした階層性は現代では意味を持たない。若年層に対して行った調査(2)で「アンマ」の回答率が高いのは、「アンチャン」の持つ上流家庭の言葉を使うという側面が失われた結果だと考えられる。

2). 男女の性差と女性の呼称について

親族呼称では男女の区別よりも「家」を継ぐか、継がないかが重要となっている。階層性についてで前述したとおり、「長男」「長女」「嫁」の呼称に家格での制限が見られることからそのことが言える。

「長女」「次女以降」と「嫁」では回答率に差があり、それは調査(1)調査(2)どちらでも見られた傾向である。これは「長女」「次女以降」は成長すると嫁ぎ、別の「家」に入る、よって生家での位置・関係による親族呼称よりも嫁ぐことによって「家」が固定される「嫁」の方が重視されているのではないかと考える。また、女性でも「長女」「嫁」に家格での制限が見られたのは、「家」を継ぐ可能性が「次男以降」「次女以降」よりもあるということが関係しているのではないだろうか。

男性に関する呼称ではない、女性に関する呼称で特徴的だったのは年齢によって呼称が変化することだが、これは女性は年齢によって「家」で果たす役割が変化していくためその呼称も変化するといえる。

3). 中高年層と若年層

中高年層では収集できなかった語が若年層から収集できたことは、これら親族呼称が単純な減少を辿っているわけではないということを示している。特に、調査(2)で収集した「ボン」「ネネ」は調査(3)で収集された意味では「息子」「乳児」で、これらは五箇山地方の「末子」を指す「ガゴ」と似たような変化を辿っているのではないかと考えられる。

おわりに

農地改革という社会構造の変化を受けて、土地にまつわる階層性がなくなり該当する層に対する親族呼称の消滅がみられた。次に人口の移動・減少により世帯形態が変化し「家」という土地に固定されたものに対して「人」が流動的になり、昔のように「家」に縛られた関係がなくなって親族呼称の元となる「家」による「人」の位置づけがなくなった。「家」を継ぐ者・継がない者を差別化している親族呼称の性質からすると、それは対象者の喪失に繋がる。しかしながら他の地域よりもこれら親族呼称が比較的残っているのは富山県の県民性、「家」に対する考え方の堅さのあらわれなのではないかと考える。平成15年の総務省の住宅・

土地統計調査でも富山県の持ち家率は79.6%で全国1位、一戸建ての割合は80.5%で全国2位と「家」に対しての考え方に特徴があり、未だ一部の親族呼称において若年層でもある程度の回答率を持つのもそのためではないかといえる。

対象者の喪失により消え、社会構造・環境の変化により使用機会が減り、「家」で「人」を区別する性質を持つこれらの親族呼称は、本来の役割が意味を持たず呼称という言葉の意味を成さなくなり消滅していくようにみえる。しかし氷見市内の中学生のように自分達の地域の言葉に対して強く意識しているという事実も見え、これら親族呼称も単純に減少しているのではないと言える。自分達の地域の言葉に意識的であるのは、情報化社会・交通の発達で、他の地域と自分達の地域の差を感じる機会が増えたからなのではないかと推測するが、このことについてはまだ調査が不十分である。

注

(1) 井伏鱒二著（1964年）『井伏鱒二全集 第二巻』筑摩書房

参考・引用文献

- 農地改革委員会編（1951年）『農地改革顛末概要』農政調査会
渡辺友左著（1968年）『社会構造と言語の関係についての基礎的研究（1）』国立国語研究所
柴田武著（1988年）『方言論』平凡社（p.272-273）
黒坂富治著（1988年）『日本わらべ歌全集9上 富山のわらべ歌』柳原書店
石黒漢子著（1991年）『富山の昔話』桂書房
真田信治著（1991年）『標準語はいかに成立したか』創拓社
雨池光雄著（1998年）『氷見地方の方言会話集①・②』西川印刷出版部
川本栄一郎著（1993年）『北陸地方における「親類」の方言分布とその変遷』『富山大学人文学部紀要』（vol.19）富山大学人文学部
飛田良文「近代語彙の概説」『講座日本語の語彙』
井上史雄著（2000年）『東北方言の変遷』秋田書店
真田信治編（2001年）『百年前の越中方言』桂書房
富山県児童文学研究会編著（2005年）『読みがたり富山の昔話』富山県児童文学研究会
総務省統計局編『国勢調査』
とやま統計ワールド（2008/12/5 参照 <http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/index2.html>）

